

Suvaらしさの素晴らしさ

河津 恵鈴（かわづ えりん／地球環境戦略研究機関 戦略マネジメントオフィス
プログラムコーディネーター）

今年2月、気候変動と保健学に関するプロジェクト支援のため、短期コンサルタントとして太平洋地域の島国、フィジー島へ向かった。

翌日、首都スバ(Suva)のオフィス街まで散歩してみたが、街はがらんとして誰も歩いていなかった。皆、日曜日は朝からお昼過ぎまでミサに参加しているからだ。何か、別世界に迷い込んだような錯覚を覚えた。

スバは、太平洋地域では裕福な都市と聞かされていたが、当たり前と思っていたインターネットを活用したサービスは少なかった。コロナ禍の規制期間中にオンラインの食料品の買い物や出前が導入されたが、緩和後には利用者が激減した。24時間営業のコンビニや店舗も、私が知る限り存在しない。

また、演劇などの娯楽は限定的で、ビーチも首都周辺にはないが、アルバートパークという比較的広い公園ではラグビーを楽しむ人たちをよく目にした。唯一の5つ星ホテルは、海に面していて、夕暮れの海をゆったりと見ていると、日没の頃には空と海面がオレンジ色に染まり、まるで絵葉書の世界にいるような素晴らしい景色を楽しめる。

しかし、着いたばかりの頃はフィジーのゆっくりした時間の感覚がわからず、戸惑った。プロジェクトの締め切りを守ろうと一人焦るものの、周りには危機感が全く伝わらず、計画通りに物事が進まないことから、ストレスを感じる事が度々あった。

それでもなんとか生活していたが、運悪く、到着してから2週間も経たないうちに、事故で怪我をしてしまった。右足だけ、歩道にあった少し深い穴に滑り落ち、そこに足を

取られたまま転倒し、ひどい痛みと腫れで全く歩けなくなった。しかし、地元の病院では当初は骨に異常はなく、ひどい捻挫だと診断され、ギプスもなく、帰宅することになった。エレベーターなしのアパートの3階に住んでいたため、事故当日の帰宅が不安だったが、建物に着いたら、アパートの警備員が声をかけてくれた。優しい笑顔だ。何も求めず、自分の背中を指しながら「乗って」と言い、私をおぶって3階まで運んでくれた。

翌日、松葉杖をたまたま所有していた職場の人に借り、松葉杖生活が始まった。片足飛びで移動するよりはるかに楽になった反面、事故前には無意識にできた調理、食卓の片付け、着替えなどに手順の工夫や時間が必要になり、生活のリズムが変わってしまった。痛みや腫れ、インターネットの不具合などで、仕事の効率も一時的に下がった。そんな生活を続けていたが、一向に回復の気配がないので、3週間経って、別の病院でCTスキャンを撮ってもらった。なんと、足の骨は三つに折れており、実は複雑骨折だったと判明した。渡航のため、無制限の健康保険に加入していたが、フィジーでの医療は限定的で、自分の期待する診断・治療を受けるのは案外難しいことが分かった。

そしてここから、自分の足が動かせないこともあり、私のフィジーでのスローライフがスタートした。戸惑うことも多かったが、スローライフの良さが少しずつ分かってきた。まずは、忙しすぎると方向性やビジョンを失っていることがわからなくなるということだ。同じ1日24時間を与えられているなら、どんどん増えるタスクをより速く、より高質

にこなしていくことを重視するようになるのが自然かと思う。私も学生時代からそのようにして努力してきた。しかし、その作業が自分のビジョンに向けてどのような役割を果たすのかを明確にしておく必要があり、逆に、生産率だけを追求してしまうと、より重要な点を見落とすことになる場合もある。個人的には、「フィジータイム」に切り替えたことで、自分と向き合う機会を作ることができた。本当に自分が大切だと感じるものと、それほどでもないものが少しずつ見えてきて、自分の価値観やライフプランを検討することができた。何より、以前は生産効率を最優先していたことで無意識に自分を追い込んでいたこともわかってきた。

また、スバの住民は、以前住んでいた東京やニューヨークと異なり、人々と繋がり、対面することを重視していて、そこに時間をじっくりかけている印象がある。時間に追われないライフスタイルを送っているため、他人への関心を持つ余裕があるのではないかと思う。フィジーには「ブラ・スピリッツ」というフィロソフィーが浸透しており、「ブラ」とは、フィジー語での挨拶だが、相手の幸福と健康を願うことを意味する。外出や帰宅の際にアパートの警備員たちがニコニコしながら私を運んでくれたり、街のレストランで知らない人たちが松葉杖を見て声をかけてくれたり、ブラ・スピリッツには度々感動した。内気な私は、助けを求めることに抵抗があったが、周りの人たちの気遣いに救われた。友人たちも頼まれていなくてもスーパーや生鮮市場で買い物をしてくれたり、本格的なインドカレーのテイクアウトを持ってきてくれたりした。人の優しさ、温かさ、思いやり。時間に追われることなく、相手を認め、困っている人を助けるフィジーの人たちを見習いたい。

フィジーは「世界一幸せな国」と言われているが、インフラ、食料安全保障、医療や教育などの社会の基盤に関する課題がたくさんあり、同時に、災害や海面上昇などを及ぼす気候変動に特に脆弱な国だ。廃棄物もほとんどリサイクルされず、定期的に違法に燃やされているごみの臭いが窓から入ってくる。

他方、日本では社会の基盤がある程度整っているが、幸せな人たちが少ない印象がある。労働時間が長く、休めない。家族や友人、趣味への時間もその分削られる。特に都会では、時間に追われ、ストレスが溜まり、数多くの社会問題や環境問題に関心を持つ余裕がない人も少なくないと感じる。

幼少期から大人になっても自然と触れ合う機会が多いフィジーの人たちは、自分たちの美しい海を愛し、誇りに思っている。ビーチがないスバでも、平日に夕焼けを見るためだけに海辺にわざわざ行く人もいるくらいだ。海の音色を感じながら、このような美しい夕日を見る日々をのんびり過ごすことにより、純粹に守りたいと思う気持ちが生まれるのかもしれない。私たちも一度速度を落とし、心を無にして、純粹に本質を見つめ直してはどうだろうか。本当に大切なものが見えてくるかもしれない。

